



高校入門期における辞書指導について

——『プラクティカル ジーニアス英和辞典』を使って

木方健晴

1. はじめに

本屋に行き英語の勉強法に関する本を探せば、それこそ百花繚乱、数多くの本が並んでいる。辞書についても様々な意見がある。「辞書はボロボロになるまで使え」など古典的なものから、「辞書を使わず、とにかく多読こそがbestだ」まで両極端だ。しかし、一英語教師として、高校1年生にどう英語を教えていくべきかを考えた時、現実目の前にいる生徒を抜きにはできない。

私の勤務校は、一言で言えば、至極「平凡な」学校である。中学時の成績はごく普通で、大学進学「希望」者が9割以上いる。生徒は、真面目で純朴な性格のものが多く、私は転勤して4年目になるが、授業態度も良く、授業で困ったことはめったにない。ほとんどの生徒は「おとなしく」授業についてきてくれる。だが、それは授業中静かに聞いていてくれるというだけで、しっかり予習して授業に臨んでくれるというわけではない。むしろ、年々家庭学習の時間は減ってきているというのが個人的な実感である。

また、生徒が今まで接してきた中学英語の授業は、おそらくcommunicative approachが主であり、その成果として授業中に発言したり、AETと臆せず話ができるというようなプラス面も多い。一方、英文を読む経験に乏しく、辞書を引いたことがないという生徒も珍しくないというのが現実である。

2. 高1の英語の授業について

さて、このような現状の中、我が校での高校入

門期の英語指導及び辞書指導はどうあるべきか、私なりに考えてみた。

3年後の大学入試を射程に入れば、読解力の養成は外せない。一口に読解力といっても、一朝一夕に身につくものではない。まず、高校英語の入門期においては、生徒の最も手近にあるのが教科書であり、教科書の英文を「読める」ようにすることが第一である。私の高校では、もともと英語好きの生徒は少数派で、放っておいても勉強していくことは望めない。まだ中学英語も十分消化しきっていないものもいる。彼らが自分ですら予習してくるとは考えがたい。さりとて、簡単に到達度目標を下げてしまってもよいものか疑問が残る。そこで、正確な文法知識を身に付け、英文和訳の練習を積み重ねることにより、教科書の英文を生徒が「自分で読める」ように高めていくのが私たち教師の最初の仕事ではないか。そのためには、初学者向け英和辞典の活用を十分指導することが不可欠である。

3. 辞書の選定

以前から、勤務校では、1年生に共通の辞書を買わせていたが、近年、電子辞書が普及し、学校に電子辞書を持ち込むものも出てきた。しかし、単に未知の単語の意味を調べるだけであれば、紙の辞書でも事足りるであろう。紙の辞書を使いこなすことに慣れてから、電子辞書を買っても遅くはない。

では、紙媒体の辞書を、新入生にどう提示するかであるが、①2冊程度の複数の辞書を推薦する



方法、②1冊の辞書を「強制的に」購入させる方法、の2つがある。①という形は、我が校では、教科書類の購入が入学式前であり、新入生がどちらにするか却って迷う場面も考えられる。その点、②の方法ならば、少なくともあれこれ頭を悩ます必要はないし、もし万が一同じ辞書を入学までに買っていたり、譲り受けたりしたものがあれば、学校で購入した後に返品もきくように教科書販売の指定店に取り計らってもらうようにすればよい。

そして、何よりも同じ辞書を学年全員が購入することで授業中一斉に辞書指導することが可能になり、demerit より merit の方が大きいと思われた。結局、今年度は『プラクティカル ジーニアス英和辞典』を購入させることにした。語法にも強いという『ジーニアス英和辞典』の特徴を継承しつつ、コンパクトにまとめられ、かつ大学受験時まで十分使用に耐えうるというのが選定の理由である。最新の辞書学の成果も取り入れられ、紙面が見やすい点も好感が持てる。語法上特に問題となるものには■が付き、例えば stop ～ing と stop to do の違いなど文法上ポイントとなる事も明示されている。

4. 実際の授業での活用例

今年度の1年生を教えるに当たって、年度当初に立てた授業方針（目標）は以下のようなものである。

- (1)教科書の英文を文法にも注意し、精読する。
- (2)辞書を授業内で活用する。
- (3)家庭での予習を促すような指導。
- (4)語彙を増強するための小テストの実施。
- (5)副教材を使用し速読の訓練。週1回10分程度。
- (6)授業にオーラルを重視した活動を入れる。

次に、実際の授業の一端、特に辞書指導について述べてみたい。まず、辞書を授業に持参させることであるが、1学期の段階ではほぼ全員が守っていたが、中には机の中や個人ロッカー内にしま

い込んでいる者もいたりした。その都度指導するが完璧にというわけにはいかない。

「予習」については、なかなか徹底できず目下最大の課題である。例えば、How come so many students are in the dormitory? という英文を授業で和訳させると、「“dormitory” って何ですか」と逆に質問されたり、「多くの生徒はどうやって寮に来たのですか」など取りあえず和訳してくれたりする。ここで辞書の出番である。生徒に一斉に辞書を引かせるとかなり時間がかかるが、同一の辞書を持たせているおかげで、dormitory の掲載ページを口頭で指示したり、how come の探し方や語法欄にも目を向けさせることができる。

とにかく、心がけていることは、できるだけ1時間の授業中に最低1回は辞書を引かせよう、ということである。予習で一度も辞書を引いたことのない生徒にも、辞書に慣れさせ、辞書引きを通じていろいろ発見があることをせめて授業で体験させようという思いもある。効果を高めるには、自分も十分「予習」しておく必要があるが。

5. 最後に

この辞書に付属する教材である『活用ワークブック』を、5月の連休中の宿題として与えたところ、多くの生徒は真面目に取り組んでくれた。このワークブックは内容が良くできているので、課題に終わらせず授業で使うべきだったかもしれない。例えば、練習問題に coffee という何気ない単語を引かせ、コーヒーの種類や用語に加え、「アメリカでは16～17歳頃コーヒーを飲むことを許可されるのは大人の仲間入りを意味する」というような文化的背景まで学ばせるものがあった。このような経験の中から、単なる意味調べでなく、辞書を引く楽しみを見つけてくれたらよいと思う。語義を確認するだけにとどまらず、後の productive な学習にもつながる活動を、今後の課題としたい。

(きほう たけはる・愛知県立瀬戸西高等学校教諭)